北原雅彦

東京スカパラダイスオーケストラ
トロンボーン奏者

デビューから33年のロングラン

筋トレで支え続ける？「スカパラ」の顔

「楽器も身体も軽くいきたいですね!」

MASAHIKO KITAHARA

流行りすたりの激しいJポップ界で長く人気を維持し続けているどころか、ファン層がますます拡大しつつある「東京スカパラダイスオーケストラ」。そのど真ん中でドレッドヘアを振りながら熱演する北原さんのパワーの秘訣。

記事協賛：株式会社 グローバル

筋トレとかそれなりに毎日鍛錬はしてるんです。

――北原さんは本番で楽器を壊すことで有名だとか。壊すって、どう壊しちゃうんですか？

北原　吹きながら楽器を左右に振ったりするので、マイクスタンドなどにぶつけちゃうんです。初期の頃はしょっちゅうでしたね。

――あの動きですものね。

北原　ぶつけると、スライドがすぐに凹んじゃう。だから、今では予備のスライドをステージの袖にいつも用意しておきます。海外で凹ませたときは予備を持って行かなかったので困りました（笑）。クリーニング棒を使って自分で無理矢理凹出ししたりもしましたね。

――30何年間あの動きでやって来られたわけですか。

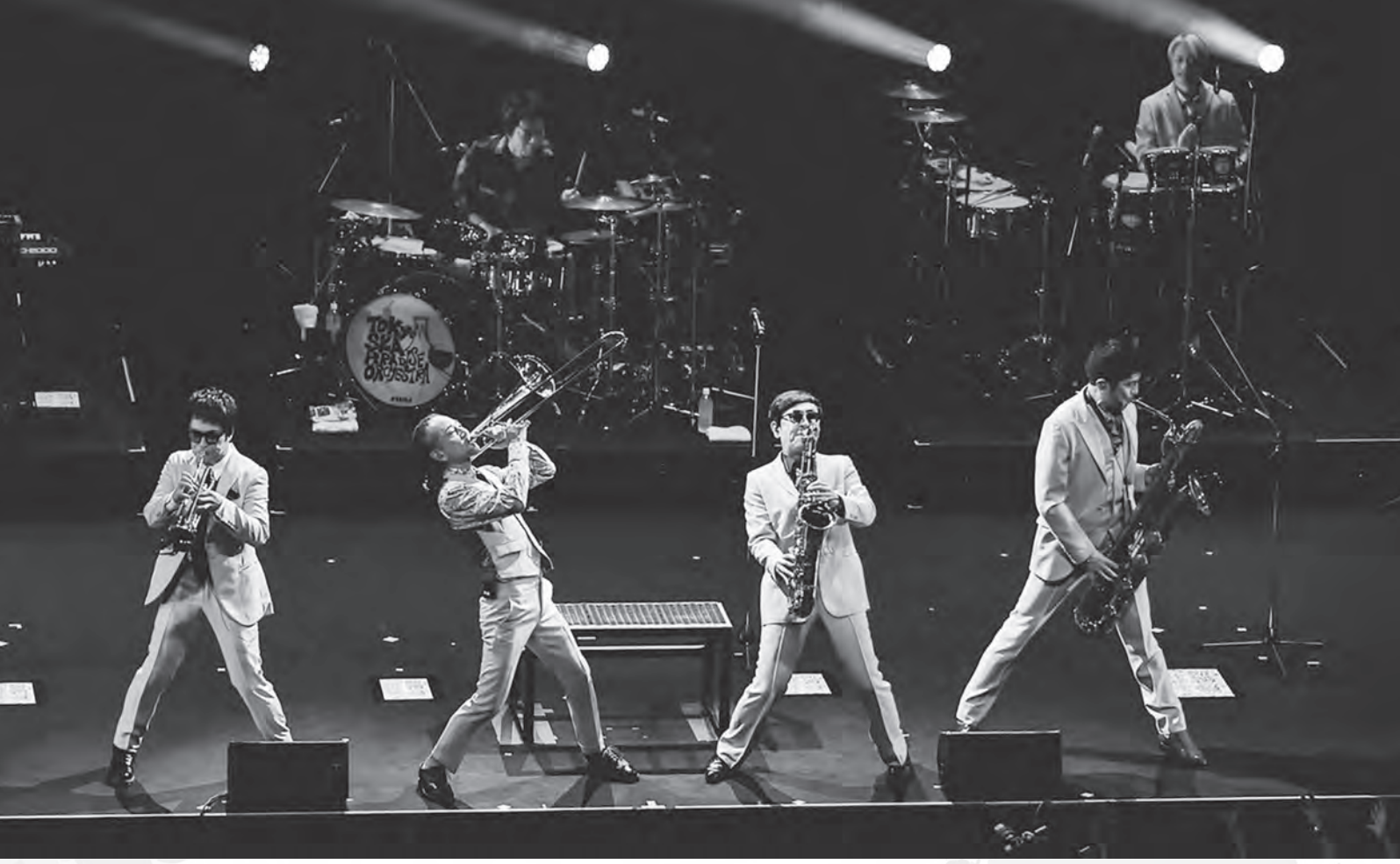
北原　そうですね。ベルにマイクを付けて最初からずっと。無理矢理やっているわけじゃなくて、音を伝える表現の一つとして視覚的要素も大事にしようということですかね。演奏していると自然に身体が動いちゃうんです（笑）。跳んだり跳ねたりすることも自分の性に合っているんでしょうね。

――人一倍疲れそうですけど。

北原　その自覚はあまりないです（笑）。筋トレとかそれなりに毎日鍛錬はしていますね。朝は野菜と肉をきちんと食べ、スクワット、腕立て伏せ、腹筋だのはもう何十年もやってます。

――実際にお会いすると本当に「贅肉ゼロ」って感じです。

北原　でも、僕、甘いもの大好きなんで



東京スカパラダイスオーケストラ。1989年デビュー。現在のメンバーは９人。世界31ヵ国で公演、著名な音楽フェスに数多く出演し、2013年米国で行われたコーチェラでは日本のグループとして初めてメインステージに立った。2019年メキシコ最大の音楽アワードでベストパフォーマンス賞受賞。「トーキョースカ」を世界に拡げている。（Photo：勝永祐介）

すよ。炭水化物は、ご飯で摂るよりはケーキで摂る（笑）。小麦粉と砂糖とバターのかたまりが大好きなので（笑）。

――それもこれも、すべては演奏のために？

北原　もちろんそうですけど、自分の身体が重たくなるのが嫌なんです。サーフィンなんかもずっと楽になる……サーフィンは20代前半からやってます。

――体幹が鍛えられそうですね。

北原　そうですね。体幹つけとくと楽器を振り回すのが楽になりますよ（笑）。

XOジョン・フェチョック・モデルに行き着いた理由

――XOの「ジョン・フェチョック」モデルをお使いなのは、やはり取り回しが良いからですか。

北原　それもあります。ステージで振り回すことが多いので、他の楽器がもう、重たく感じられてしまう。以前はキング2Bのシルバーソニック……これは相当に重かったですけど、スカパラでもこだわりなく使ってたんですけどね。でもこの楽器に出会ったら、違いは歴然としていた。

フェチョック・モデルはベルが非常に薄くて、スライドも含め、軽量化にとことんこだわったモデルですけど、でも吹奏感は軽すぎず、中低音域もブンと太い音が出るし。

――パーツ類も軽量化されているんですか？

北原　管を補強するパーツなどが極力小さく抑えられてますね。例えば、僕、初めて見たんですけど、スライドの差し込

フェチョック・モデルは軽量化にとことんこだわったモデル。

XOのフェチョック・モデル：マウスピースを差し込む側のスライドのスリーブが、本体側のスリーブより短い。

XOのフェチョック・モデル：バランサーを一番下までストンと下げられるよう支柱の下側には補強パイプがない。

筋トレで支え続ける?
「スカパラ」の顔

北原雅彦

み口にあるスリーブ状のこのパーツ（写真）。普通はマウスピースを差し込む側と、本体に差し込む側のパーツの長さは同じですけど、フェチョック・モデルはマウスピース側が短くなっている。口に当たる側が短いので、抵抗感も少なく感じます。

バランサーが付けられるこの支柱も面白いですね（写真）。バランサーは可動式で、バランサーを下げるほど抵抗感が減るんですが、バランサーを一番下までストンと下げられる支柱の形になってます（支柱の下の方には台座につなぐ補強パイプがない）。

――いつもバランサーを付けていらっしゃる?

北原　これは全くの好みですけど、付けた方が音の締まりがよくなる気がします。ベルの支柱も独特のカーブを描いてますが、これも、ベル側の支柱を先端寄りで止めることで音をコンパクトにしているんだと思います。

――フェチョック・モデルにはイエローブラスベルとゴールドブラスベルがあります。

北原　僕はイエローを使っていますが、これも全くの好み。ゴールドブラスベルは、より音が柔らかくなる感じがします。

――野外ステージも多く、ライトウェイトの楽器だとどうですか? もっともPAを使われるわけですが。

北原　音に明るさがあるのでサウンドのバランスは非常に良いですね。ベルマイクを付けるとベルの振動がやや抑えられますけど、逆にそれがほど良い抵抗感に感じます。

――お使いの7インチ半ベル／12・65㎜ボアよりも大きい、8インチベル／12・9㎜ボアのモデルもありますね。

北原　キングで言えば2Bと3Bの違いのようなものかな。8インチベルのモデルは5年ほど前に出たもので、「もう少し大きめのモデルも欲しい」というプレイヤーたちの要望に応えて出したと聞いてます。音ももちろん太くなるし、とってもいい感じですよ。

――それでもベルは7インチ半がお好みですか。

北原　もともとバック「12」のコンパクトな音が好きで、それが正に7インチ半に12・7㎜ボアという楽器。このサイズ感が、自分がイメージする好きな音に近いのかもしれません。

銀メッキに赤ラッカーかけるとピンクになると聞いてすぐに飛びついて（笑）。

――ピンクは北原さんのトレードマークですね。ケースまでピンク!

北原　派手な色が好きなんです! ケースにベタベタとステッカー貼っちゃった（笑）。その後は、ジュピターにバック12と同じ7インチ半ベル／12・7㎜ボアのモデルがアメリカにあるというので、とにかくそのサイズが好きだから取り寄せてもらい、一時期ずっとそれを使ってました。そうこうするうちにXOのジョン・フェチョック・モデルが出た（2013年）。しかもライトウェイト。すぐに試奏させてもらい「これだ!」と。

――お使いのマウスピースは?

北原　今はグレグ・ブラックのNY11Cという、随分前に買ったやつを引っ張り出して使ってます。ちょっと質量のあるタイプです。一番最初は、マルシンキヴィッツのすごくライトなやつでバックを吹き、そこからJK、シルキー、ジャルディネリとかいろいろ変えて来て、たまたまグレグ・ブラックを使ってみたら音色がしっくり来たんです。軽い楽器とバランスがとれるのかもしれませんね。

――リムは?

北原　ちょっと厚めでエッジもややある方が好きです。リムが厚いとコントロールしにくくなるとは言いますが、持久力はある気がしています。

ピンクのXO!

――そもそもXOはいつからお使いになられてるのですか。

北原　グローバルの拝藤（耕一）さんがXOを設計し、テナーとテナーバスのラインナップを発表した最初（1995年）からです。テナーのボアサイズはキングの3Bと同じで、ベルは8インチまでなくて、ややコンパクトだった。それを吹かせて頂いたらすぐに好きになって……。銀メッキの上に赤いラッカーをかけるとピンクになると聞いて、すぐにお願いしました（笑）。ピンク仕様のモデルも発売されたりしたんです。

XOの生みの親である拝藤耕一さんと。グローバルを定年退職し今は自分で仕事をされているが、この日たまたまグローバルを訪れ、取材現場に顔を出した。

筋トレで支え続ける?
「スカパラ」の顔

MASAHIKO KITAHARA

スカパラ・サウンド人気の秘密

――スカパラで北原さんのトロンボーンは比較的上の音域を吹き、独特の色を醸し出していますね。

北原　自分がアレンジすることが多いのですが、一般的にテナーサックスがトランペットの6度下でハモるような場合でも、それをトロンボーンでやることが多いですね。それで僕の音域が高くなる。

――なぜそのように?

北原　そんなサウンドが好きだから、ということですけど、多分、トランペットとトロンボーンがユニゾンを吹いてテナーがハモるよりも、トロンボーンがハモった方がちょっと太めの独特の音像が得られる。主旋律は弱くなるかも知れないけれど、うちの場合はトランペットとテナーとバリトンの3管がほぼユニゾンで行き、トロンボーンが3度とか6度でハモるというサウンドになってます。それがスカパラ・サウンドの特徴と言えば言えるかも知れませんね。

昨年還暦を迎え、赤い衣装でステージに立った。「あちこちのフェスに行っても大体、一番年上ですね。もちろん自分では全然ピンと来ないんですけど」

たぶん、僕らは昔からあまり変わっていない。

――アレンジは最初から?

北原　33年間やり続けております（笑）。

――流行り廃りの多いJポップでは驚異的な歴史を刻まれてますね。アレンジではその都度、時代のモードのようなものを採り入れて来られたのですか。

北原　いや、自分の中では変わってきた感じはあまりないんですよ。その楽曲に一番合った、歌もののアレンジだったら、歌を引き立てつつ、自分たちも管楽器の美味しいフレーズをチョイスするということを毎回考えて来たので。

　変わった所って何だろう?　逆に世の中がどんどんデジタル化していく中で、僕らのような生のアナログな音が、良い意味での「異物」であり続けている結果かも知れないですね。たぶん、僕らは昔からあまり変わっていない。だから今でも「あ、スカパラのサウンドだ」と誰にでもすぐに分かるし、実際、そう言われることが多いですね。

――海外でもスカパラのサウンドは人気があるのでは?

北原　特にメキシコなどでよく聴かれていますね。何とはなしに哀愁があって、良い意味であまりカチッとしていないと言うか、ヒューマンな感じが受け入れられているのでしょうかね。

――YouTubeでスカパラのいろんな動画が観られますが、中にはクリック数が1000万回を超えるものもあってビックリします。

北原　それは、2016年にさかなクンと一緒にやった「Paradise Has No Border」ですね。TVCMで話題になった新曲で、さかなクンがバスサックスで参加してくれました。ありがたいことに、全国の吹奏楽バンドで今でも演奏されています。さかなクンとはスカパラのライブのゲストで来てもらったり、他にもいろいろ共演しています。

――スクールバンドとコラボすることも多いんですか。

北原　最近多くなりました。一番最初は、習志野高校吹奏楽部と共演した《風のプロフィール》というミュージックビデオ（2019年）。テレビ朝日の『ミュージックステーション』にも一緒に出ました。最近では、NHK「みんなのうた」でYOASOBIの《ツバメ》という曲を都立片倉高校吹奏楽部と共演してます。

　個人的にもありがたいことに学校バンドと共演する機会を頂いて、北海道の立命館慶祥高校がゲストに呼んでくれたり、この10月には山梨県の富士学苑という中高一貫校のジャズバンドと共演しました。11月5日には僕の出身校の横浜市立田奈中学校が地元（緑区）の区民センターで後輩たちと一緒に演奏する予定です。

　普段は都内で月に一度ほどジャズのセッションをやっているんですが、こうした交流もこれからどんどんやって行きたいですね。学生たちの明るくフレッシュなパワーに触れると、僕らもエネルギーをもらえますから。

――心の「筋トレ」になりますね。■

「ケースもピンクにしたんだけど、目立ちすぎるのでステッカーをベタベタ貼っちゃった（笑）」